

～名門から隠れた宝石まで～

# 一度は回りたい “日本の聖地”100選

全英オープン第1回大会の舞台はスコットランドのプレストウィックGC。  
名物ホールのひしめく名門だが、それに匹敵するコースが九州にあった。

選・文／大塚和徳

日本のプレストウィック

くまもと阿蘇カントリークラブ  
(湯の谷コース)

熊本県 **C**



これが3番の“馬の背”。前方の山並みも息を呑むほど雄大だ。

井上誠一監修という横顔に魅かれてくまもと阿蘇CC(湯の谷コース)を訪れた。九州の阿蘇国立公園内を通るJR豊肥線赤水駅から車で約10分、杵島岳方向へ登った湯の谷の高台にある18ホールである。プレー後の率直な感想は、「こんな魅力的なコースが日本にあるとは！これぞ日本のプレストウィックGC」であった。スコットランド西海岸のこのコースは、1860年に全英オープンが誕生したコース。だがそれ以上に、フェアウェイを切断する「カーディナル・バンカー」、グリーン前に大きなマウンドがある「アルプス」等々、多くのユニークなホールで有名である。「コース設

計家を目指すなら、ここを何度も回って各ホールを研究せよ」とは、全米オープン・ドクターの異名を持つ名設計家リース・ジョーンズの至言といえる。くまもと阿蘇CCは、まさにこのプレストウィックを彷彿させる。個性的なホールが多く、強く印象に残る。立体的な1番、2番ホールを通過し、次が名物のパー5「馬の背」。ティショットはフェアウェイ全体を覆う巨大マウンドの「馬の背」に立ち向かい、実質、240ヤード飛ばないと上まで届かない。左右にずれても問題である。頂上は約70ヤードがフラット、その先は急激に落下し、下は左が高く右が低い見事な2段フェアウェイ。グリーンは左後方にあつて、奥が深く高い。風にもよるが、ロングヒッターは「馬の背」から2オンを狙うという。このホールだけでも、ここに来た甲斐がある。だが、ユニークなホールはまだ続く。5番パー4は「203高地」の異名どおり、厳しい打ち上げ。6番は雄峰杵島岳に向かって豪快な打ち下ろしで、第2打地点はフェアウェイがうねり、盛り上がったグリーンは手強い。インに入って14番パー5はそれこそ「アルプス」の概念を反映したかのように、グリーン前に大きなマウンドが立ちはだかる。近代設計では出合わないクラシックの醍醐味である。17番は全米オープンで昨今流行のグ

リーンの周りが危険な「ドライバブル・パー4」。時代を先取りした設計者の智慧に感心する。まさに名ホールのオンパレードだが、秀逸なのはやはり「馬の背」。もしこのホールがスコットランドにあつたなら、今頃はアメリカの方々が真似されていたことだろう。熊本ゴルフは、1931年黒石原に誕生した「熊本ゴルフ倶楽部」で始まったが、戦争によって断絶してしまふ。戦後、湯の谷の観光ホテルに来たアメリカ進駐軍が、近所の農民をタダで使つて粗雑な9ホールを造つた。それが返還された後、再生した「熊本ゴルフ倶楽部」は、復活の地にご湯の谷のコース跡地を選んだのである。1927年、福岡GC和白コース建設中の保田与天に頼んでアウト9ホールを新設、その後、18ホールへの拡大で名匠井上誠一が監修した。現在のクラブ名は最近変更されたものである。

なお、このコースが育てた名ゴルファーが、アマとして、プロとして数々の実績を残し、賞金女王を3人も育てた清元登子プロであることをつけ加えたい。



題字・イラスト／小寺茂樹

●コース所在地:  
熊本県阿蘇郡南阿蘇村大字河陽5992-2  
☎0967-67-0321  
URL: <http://www.aso-yunotani.co.jp>

おおつかかずのり／ゴルフ史家。1934年生まれ。東京大学経済学部卒、米国でMBA取得。英ターンベリーホテルの経営、ジ・オックスフォードシャーGCの建設に携わる。海外で回ったコース350以上、米ゴルフマガジン誌「世界ベスト100コース」の選定パナリスト。英ロイヤル・ノースデボンGC、英ロイヤル・セント・デイビッドズGC会員。著書に「ゴルフ千年」——タイガー・ウッズまで(中公新書ラクレ)、「世界ゴルフ見聞録」(日本経済新聞出版社)など。